滋賀県における朝鮮人強制動員の記録(4)
―韓国における生存者の聞き取り調査より―

河　　かおる
人間文化学部国際コミュニケーション学科

1．はじめに

本稿では、33号、34号、36号に引きつづき、滋賀県に強制動員されていた生存者の聞き取り調査結果を報告する。ただし、今号掲載の聞き取りは筆者が直接行ったものではなく、長野県強制労働調査ネットワークが、筆者と同様に韓国の政府機関「対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」(以下、「韓国支援委員会」)の協力を得て実施した調査結果の一部である。

2．経緯

なぜ、長野県強制労働調査ネットワークの調査結果の一部をここで取り上げることになったのか、その経緯を説明する。

同ネットワークは、長野県内の朝鮮人強制連行に関する3団体(松代大本営の保存をすすめる会、松本強制労働調査団、平岡ダムの歴史を残す会)によって構成されるネットワークで、「韓国支援委員会」の協力の下、2011年11月～2012年11月にかけて、長野県に関係があると思われる韓国在住生存者13名から聞き取りを行った。ところが13人の証言者の一人SH氏の証言が、長野県ではなく滋賀県に連れて行かれたという内容であった。

2013年3月30日、東京で開催された第6回強制動員真相究明全国研究集会で、長野県強制労働調査ネットワークの原英章氏が調査報告をし、やはり報告者として参加していた筆者もSH氏証言内容を知った。その後、2014年3月15日に京都で開催された第7回強制動員真相究明全国研究集会で原英章氏と再会した。

関西に来た原氏を交えて、SH氏の証言について検証するため、会合をもった。松代大本営の保存をすすめる会の会員で、長浜市在住の水田誠氏が声をかけてくださり、『本土決戦と滋賀』(サンライズ出版、2014年)などの著作がある水谷孝信氏、そして筆者が集まった。後述のとおり、結局、SH氏の所属部隊の駐屯場所等は特定できなかったが、証言内容が事実であれば、これまで知られていない空襲被害を証言するものとなるため、改めて河が録音記録を聞き直すこととなった。

SH氏証言は、既に長野県強制労働調査ネットワークにより2013年に発行された『韓国聞き取り調査報告』という冊子にA4で8頁にわたり詳細が掲載されている。調査は通訳を介して行われ、冊子に掲載された記録は通訳を介して伝えられた日本語の内容によるものであるという。そこで筆者は、同冊子の記録も参照しつつ、聞き取り調査当時の録音記録の提供を受け、SH氏が韓国語で話す内容を改めて直接聞き取り、本稿をまとめた。

なお、同冊子ではSH氏の実名が書かれているが、本稿ではこれまでと同様の方式でイニシャルを用いることとする。

3．留守名簿

SH氏の創氏改名された名前(以下、「創氏名」)が掲載されている名簿がある。「昭和二十年五月一日　第二中隊アイウ名簿　第五農耕勤務隊第二中隊」および、「昭和二十年五月二日　新入隊兵アイウ名簿　第五農耕勤務隊第二中隊」という表紙のある名簿[1]である。同名簿には、SH氏を含め本籍地を朝鮮とする約250名が掲載されている。1993年に日本政府より韓国政府に提供された強制連行関連名簿類に含まれる、陸軍の「留守名簿」114巻の一部である[2]。

名簿には、以下の各項目を記入するように罫線が引かれている。①「編入年月日」、②「前所属及其編入年月日」、③「本籍地(在留地)」、④「留守担当者名(住所、続柄、氏名)」、⑤「徴集年」、⑥「任官年」、⑧「役種兵種官等並等給級俸月給額発令年月日」、⑨「氏名　生年月日」、⑩「留守宅渡ノ有無」、⑪「補修年月日」。

このうち、①欄には年月日ではなく通し番号が「252」から「495」までアラビア数字で書き込まれている。⑥、⑩、⑪欄は全て空欄になっている。⑤「徴集年」は全て「昭和19」とされており、③「本籍地」は全て朝鮮の地名で、忠清南道(SH氏の出身地)と平安北道が大半、江原道が時々見られる。

②「前所属及其編入年月日」欄は、SH氏を含むほぼ全てが「歩第七七聯隊補　昭二〇・三・一一」と書かれている。⑧「役種兵種官等並等給級俸月給

額発令年月日」欄は、SH氏を含むほぼ全てが「一補・歩二　昭二〇・三・一一」と記されている。頁の最後に②欄の記載が「京城師管区工兵補　昭二〇・五・一四」という「新入隊兵」の情報が1～4名分書き足されている頁があり、それらについては⑧欄の発令年月日も5月14日となっている。

⑨「氏名　生年月日」欄は、創氏名が記入され、生年は「大正一三」が大半で、一部「大正一二」と読める者がある。判読しにくいが、大正12(1923)年は12月生まれのみ、大正13(1924)年は1～11月生まれのようなので、第1回徴兵検査対象者から成っていると推測される。

以上から、SH氏を含む第五農耕勤務隊第二中隊所属の朝鮮人兵士は、第1回徴兵検査の対象となる生年月日であり、1944年4～8月にかけて実施された第1回徴兵検査後、第一補充兵となって1945年3月に召集され、歩兵第77聯隊(平壌)で訓練を受け補充隊に編入、日本へ渡り、第五農耕勤務隊第二中隊に5月1日に配属されたと推測される。

4．第五農耕勤務隊

次にSH氏が配属された第五農耕勤務隊について、既存の研究でわかっていることを確認していく。なお、徴兵された朝鮮人による「農耕隊」全般については、拙稿「滋賀県における朝鮮人強制動員の記録(1)」(『人間文化』33号、2013年3月)に書いたので重複は避ける。

塚崎(2004)によれば、1945年1月30日、軍令陸甲第16号「農耕勤務隊臨時動員要領」が出され、食糧用だけでなく航空機の代用燃料を生産するために農耕勤務隊を編成し、初期は日本人をもって充てるが、1945年4月下旬以後、陸軍糧秣本廠長が朝鮮軍司令官と協議して朝鮮人「兵士」約12,500名をもって交代させるとされた。結果、農耕勤務隊は第一から第五まで編成され、一隊につき2500名の朝鮮人が配属、一隊は10の中隊からなり、一中隊は朝鮮人250名に日本人50名が標準とされた。「動員要領」によれば、一中隊に与えられる武器は銃剣15本で、日本人の下士官以上にしか与えられなかったとみられる。

第五農耕勤務隊も10中隊からなり、長野県の上伊那、下高井、北佐久などに展開しており、全中隊の「留守名簿」が残っている。さらに第八中隊の表紙には「長野地区　滋賀地区」と明記されており[3]第五農耕勤務隊の一部が滋賀県にも派遣されたことは分かっている(滋賀県のどこかは定かではない)。水谷孝信(2009)に、大郷内湖での干拓作業に「第五農耕隊勇士」が来ていたことを伝える『滋賀新聞』記事および朝鮮人の「農兵さん」に関する地元民の回顧が紹介されているが、第何中隊かは不明である。

ところでSH氏は第二中隊の所属であり、第二中隊の全部もしくは一部も長野県ではなく滋賀県に派遣されていたことになる。このことは、SH氏への聞き取り調査で初めて分かったことである。

第五農耕勤務隊の「留守名簿」を分析した金廣烈(2010)によれば、第二、三、四中隊は、他の中隊に比して人員が少なく、朝鮮人のみが記載されていて日本人の記載が無いという。確かに第二中隊の名簿は筆者も確認したが、日本人は1名の記載があるのみである。

また後述のように、SH氏は自身の任務内容は開墾・農耕ではなく防空監視であったようだ。塚崎(2004)は、農耕勤務隊は開墾・農耕だけにあたっていたわけではなく、状況によっては飛行場建設や道路建設などの土木作業に当たらされていたようだと指摘しているが、SH氏のケースもそれにあたるのかもしれない。

5．SH氏への聞き取り調査結果概要

以上を踏まえ、SH氏への聞き取り調査結果を見ていく。調査は、2012年11月14日午前に、約1時間半にわたって、忠清南道唐津郡にあるSH氏のご自宅で行われた。調査者は、長野県強制労働調査ネットワークから北原高子氏、近藤泉氏、原英章氏、朴貞雅氏(通訳)である。調査は通訳を介して行われた。以下、話が重複・前後している部分等を時系列に再構成し、SH氏の述懐内容の概要を□で囲って示した上で、補足説明などを加えていく。なお、地名等、SH氏が日本語で発言した用語(地名以外)はカタカナで示し、(　　)で漢字表記を補足することとした。〔　　〕は筆者による補足である。

1)出生から召集まで

名前はSHです。倭政〔日本の統治下のこと〕の時は貞村○○〔創氏名〕でした。うちの一族はみな貞村になりました。生年月日は1924年11月25日です。〔忠清南道唐津郡順城面〕楊柳里、今と同じと

ころで生まれ育ちました。農家の３人兄弟の長男です。母が病気だったので18歳で早めに嫁をもらい、20歳の時には長男も生まれました。その息子ももう71歳です。

生年月日は、前述の「留守名簿」では11月３日となっており、異なるが、創氏名、住所、「留守担当者」としての父の名前などが全て「留守名簿」と一致しており本人に間違いない。

初等教育を受けたかどうかについてのやりとりがないので不明だが、他の質問で「字の読み書きができた」「日本語による意思疎通はできた」というやりとりがあることから、公立普通学校で初等教育を受けていた可能性が高い。だとすると、1932年開校の順城普通学校（４年制）[4]に入学したと推測される。

〔召集〕令状が来て、徴兵１期生として徴兵されました。1924年生まれは皆そのときに徴兵されたんです。同じ村から４人が徴兵されました。このうち１人は戻りませんでしたが、あとは戻って来ました。戻ってこなかったのは李○○と言います。鳳巣里の人です。別の部隊だったのでどうしたのか知りませんが、戻って来ないので死んだのだろうと思っています。

戻ったのも、もう皆〔年老いて〕死んでしまって生きているのは私だけです。〔第二中隊の留守名簿を見て〕この人も同じ楊柳里の人です。一緒に滋賀県に行きました。

〔出征の時は〕１期生だから村で大歓送してもらいました。長男であり夫である私がいなくなって、残された家族は大変だったと思います。

徴兵検査を受けた時期や、甲種、乙種などの検査結果、召集令状を受け取った時期などについてのやりとりは無いので不明である。おそらく、1944年４～８月にかけて実施された第１回徴兵検査を受け、第一乙種合格して第一補充役となり、1945年３月頃に召集されたと推測される。

２）平壌での訓練

合徳で一晩泊まり、そのまま列車で平壌へ向かいました。召集されて平壌の44部隊に入りました。平壌では約３ヶ月間、訓練を受けました。大きな軍靴をはいて、砂袋を脚に付けて走る訓練など。足から血が出るほどでした。とても大変でした。

日本人も配属されていて、全部で400人ほどで日本人と韓国人は半々ぐらいでした。チャンポンです。韓国人は平安南道の出身の人が多かったです。私は１期生ですがしばらくすると２期生、３期生も来ました。

訓練の命令は全部日本語でした。ゴチョウ〔伍長〕が命令するんです。赤地に金色の線が入って星が三つ。その上に中隊長、大隊長などいました。名前は覚えていません。日本人です。日本語はつっかえながらもなんとかできて、命令ぐらいはわかりました。

合徳面（現・唐津市合徳邑）は、SH氏が住んでいた順城面の隣の面（村）で、唐津郡南東部の中心地だったが、鉄道の駅は無かったので、おそらく唐津郡で召集された者が合徳に一度集結し、そこから天安駅へ行き、平壌まで鉄道で向かったと思われる。

「平壌の44部隊」について見ていく。厚生省援護局「陸軍北方部隊略歴（その５）」（昭和38年３月）[5]によれば、1944年４月に第三○師団の南方転用に伴い、その隷下にあった歩兵第77聯隊は歩兵第77聯隊補充隊となった。平壌師管区歩兵第二補充隊（歩兵第77聯隊）の通称号が「朝第44部隊」である。「朝第44部隊」は1945年２月28日、軍令陸甲第34号により臨時動員が下され、同年４月７日、平壌において歩兵第77連隊補充隊を基幹として編成完結、同地区の警備ならびに「他地域への人員の補充等に従事」とある。

同時期に第四農耕勤務隊に所属し愛知県に来ていた金致麟氏も、平壌の「第44部隊」で訓練を受けたと証言している[6]。金致麟氏も1924年生まれの徴兵１期生で、1945年１月に召集され、平壌の「第44部隊」に入ったという。ここで午前と午後各３時間、隊列訓練を約２ヶ月間受け、４月３日に非常呼集を受けて平壌から列車（貨車）に乗せられ、一週間後に釜山に到着した。そのまま関釜連絡線に乗せられ、下関に直行、再び軍用列車に長時間乗せられた。第四農耕勤務隊に所属し愛知県碧海郡依佐美村野田地区に行った。宿舎は野田国民学校で、ムギの刈り入れや田植え、開墾、水路掘りをした。

SH氏は「44部隊」では日本人もいたと証言しているが、「戦友会データベース」[7]によると同部隊の戦友会が愛知県にあるので、確かに日本人がいたようだ。「しばらくすると２期生、３期生が来た」というのは、第２回目の徴兵検査が1945年２月から時期を繰り上げて実施され（５月まで）、３月から現役徴集がなされた（塚崎2004）ので、それを指すのかもしれない。もしくは、33号でとりあげた

HK氏のように4月頃入営した第1回徴兵検査の第一補充兵もいたようなので、そのことかもしれない。

3）渡日、滋賀県へ

平壌で訓練が終わったら北満州に行くと思っていたのに、滋賀県に行くことになりました。平壌から釜山まで列車で行き、釜山からは連絡船で下関へ行きました。人数は数百人、たぶん5～600人ぐらいだったと思います。たくさんいました。

下関ではB29が飛んできて空襲警報が鳴り続けていて、そのせいだと思いますが夜に列車で移動して滋賀県に向かいました。私は二中隊三小隊に属していました。

平壌を離れ釜山、そして下関へ向かった時期についてのやりとりは無いので不明であるが、先に見た金致麟証言や、以下に見る速水証言等に照らし、4月ではないかと思われる。

第五農耕勤務隊第一中隊を率いた速水勉氏の証言[8]によれば、第五農耕勤務隊は1945年2月に編成され、4月に朝鮮から兵隊が来るまでの2ヶ月間、滋賀県和邇村で50名の下士官、兵と共に女学校の夏季宿舎に合宿して水田の高畝栽培の練習をした。4月23日、速水氏を含め、各中隊から3名合計30名が釜山まで「半島兵受取り」に向かったが、途中、前をゆく連絡船が魚雷でやられたという。4月30日に釜山で朝鮮兵3000名を受取り、10中隊に300名づつ配分し、速水氏の第一中隊は5月4日に長野県北佐久郡に帰着した。

また塚崎昌之(2007)によれば、朝鮮軍が4月7日付けの電報文で船舶司令部に輸送船の手配を依頼したが、その中に農耕勤務隊13000名を4月下旬に輸送を希望するという内容が含まれている。速見証言とも符合する。

以上の内容と、先にみたSH氏の創氏名が掲載された第二中隊の「留守名簿」編成の日付（5月1、2日）からみて、SH氏の所属した第二中隊もこの速水証言の第一中隊と同じように動いたと思われる。おそらく下関から名古屋までは第五農耕勤務隊の10中隊とも一緒に列車で移動し、名古屋で分散したのではないか。

4）滋賀県での任務

私がいたところは皆が滋賀県だと言うので滋賀県だと知りました。山の中の三階建ての中学校校舎に寝泊まりしていました。人はまばらで、女、子どもしかおらず、畑作ばかりのところでした。貯水池で魚を捕って食べました。湖からも近かったです。

食料は飛行機で補給されるはずなのですが、空襲警報が鳴ってなかなか届かず、とにかくひもじい思いをしました。豆ばかり食べたときもありました。食料は決まった場所に落とすようになっていたのです。滋賀県では空腹がいちばん大変でした。近くに農家があっても〔部隊の人数に比べて農家の数が？〕少ないから〔飛行機で補給を受けたと思う〕。食べものを探しに部隊を出る者もいて、見つかるとひどく罰せられました。訓練は平壌での訓練のほうが大変でした。

20～30人で一小隊、小隊長は日本人、九九式の銃がありました。馬はありません。私はセントウボウ〔戦闘帽〕にアカイのに星一つ、二等兵でした。

韓国人と日本人混合の5人一組、2時間交代で、歩哨にたちました。日本人は年上でした。地面に掘った穴から空を見て、飛行機の数や方向等を報告することが任務でした。

歩哨と訓練の合間には近所の農家の田植えを手伝ったりはしましたが、農耕隊ではありません。鍬や鋤を与えられてもいません。

韓国人の兵隊は皆もともと農家だから、田植えなんかうまいですよ。日本の婦人は親切で、ニギリメシをくれるのでありがたくいただきました。

B29が飛んできて空襲警報がしょっちゅう鳴っていました。防空壕は最初から掘ってあって、自分たちは掘っていません。警報が鳴ると防空壕に入って、解除されるとまた出ました。

夜の歩哨にたっている時、近くのまちに夜通し爆撃があり、明かりがみえました。湖から離れた場所のまちです。

ふるさとに手紙を書けと言われて何回か書きましたが、向こうからは手紙は届きませんでした。

調査者は、「第五農耕勤務隊」と書かれた名簿もSH氏に見せながら、開墾などの作業をしていなかったのかと、表現を変えて何度も質問したが、SH氏は暇を見て田植えを手伝った以外は農作業はしていないし開墾もしていないと答えた。ではどんなことをしていたのかと問ううち、防空監視のような任務を行っていたことが聞き出せたという流れである。

滋賀県県政史料室編(2013)によれば、1943年時

点で県下には22箇所の防空監視哨が置かれていたという。県政史料室に水田誠氏が問い合わせて入手した「滋賀県防空監視哨配置並防空通信系統図」(昭和14年)には26箇所の監視哨が図示されている。また、清水啓介(2011)[9]には、22箇所の監視哨と大津監視隊本部、米原監視隊本部の所在地や実地調査結果がまとめられている。

これらの資料をつきあわせ、SH氏の証言する条件と一致しそうな防空監視哨があるか、検討してみる。まず、SH氏の証言では建物の中での防空監視ではなく、地面にもぐってと述べていることから、聴音壕がある次の4箇所に絞られる。

土山防空監視哨(甲賀市土山町)
鏡山防空監視哨(蒲生郡竜王町)
大瀧防空監視哨(犬神郡多賀町)
賤ヶ岳防空監視哨(長浜市木之本町)

このうち、琵琶湖が近い、山がち、人里離れているなどを考慮すると、賤ヶ岳防空監視哨が最も条件にあてはまる。清水啓介(2011)によると、賤ヶ岳防空監視哨は、賤ヶ岳の一番高いところにあり、木造平屋の上に見張り台があり、下は事務所で、素掘りの聴音壕があったが屋根は無かったという。

賤ヶ岳であれば、7月12日の敦賀空襲や同29日の大垣空襲を目視できたと思われ、その点でのつじつまは合う。長野県強制労働調査ネットワークによる調査報告冊子では、目撃した空襲が「琵琶湖の向こう側」とされており、確かにインタビューでもそのように通訳されているが、SH氏自身の発言だけ聞き直すと、「湖のほうじゃなくて、離れたところ」というような表現になっている。つまり、琵琶湖越しに離れたところとも解釈できるが、琵琶湖と反対側に離れたところとも解釈できるような話し方である。必ずしも琵琶湖の対岸に空襲を見たわけではないという前提で聞き直すと、「夜通し空襲」などの条件にあうのは、県内の空襲ではなく敦賀や大垣の空襲ではないかと考えられる。その点でも賤ヶ岳の可能性が高いように思われる。

ただし補給物資が飛行機で運ばれたというのは、どの場所だったとしても疑問で、その点を調査者も何度も確認しているが、SH氏は確かに飛行機で補給されたと答えた。また宿舎とした学校がどこかも特定が難しい。学校自体が山の中にあるような話しぶりだが、次に述べるように機銃掃射の標的になったことからも、山中にある廃校というわけでもなさそうである。

死ぬ思いをしたこともありました。ある日、宿泊していた2階で朝食を取っていたら、米国のカンサイキ〔艦載機〕が窓から機関銃で撃ってきて、うちの部隊で30人ぐらい亡くなりました。亡くなった遺体をどうしたかは知りません。

水谷孝信(2014)は、この証言を引いて、これが事実なら「県下最大の被害となる」と指摘している。ますます「どこにいたのか」を特定したいが、残念ながら決定打が無い。

5) 原爆投下後の広島を経て、帰郷

解放〔日本の敗戦〕は知らされないまま、トラックで200人ぐらいが広島に連れて行かれ、そこで残骸の片付けや、つまった穴〔下水などか?〕の復旧などをしました。遺体もたくさんあってひどかったです。遺体の処理は担当ではありませんでした。

〔惨状を見て日本が負けたと思わなかったかと問うと〕そこに落とされた爆弾が原子爆弾だということは韓国に戻ってから知ったんです。だから普通の空襲と思っていたし、敗戦も知らされないから日本が負けたかどうか、知らされるまでわかりませんでした。

20日ぐらいしてようやく中隊長から〔日本が〕無条件降伏したと、解放を知らされ、解散になって下関に向かいました。6人一組となり、部隊から鍋、米、豆を与えられました。汽車賃、船賃はかかりませんでした。

下関ではギョライ〔機雷か?〕をすくい上げないといけないというので待たされて、半月ぐらいしてようやく船に乗ることができました。下関から釜山まで8時間ぐらいかかりました。早かったほうですよ。

釜山から天安まで列車に乗って行って、天安からは唐津郡でトラックを出してくれて、それに乗って帰りました。

先に見た速水氏の証言によると、第五農耕勤務隊第一中隊では、朝鮮人兵士たちをどうやって帰国させるか、「一番困った」としている。「方法は中隊ごとに異なっていた」とされ、ある中隊では中隊長代理をしていた日本人少尉が、朝鮮人兵士の「反乱」を治めきれずに自殺したというエピソードも紹介されている。結局、第一中隊では、新潟から船を出すことも検討したが上手くいかず、中隊長の判断で9月17日に解散帰国させることとし、汽車に乗せて

西に向かわせたという。

本誌33号掲載のHK氏の証言では帰国は秩序だっていたとした反面、34号掲載のKJ氏は無秩序だったとしていたように、朝鮮人兵士の引揚のパターンは一様ではなかったようである。SH氏は、日本の敗戦を知らされないまま、第二中隊全体で原爆投下後の広島までトラックで移動し、そこで作業をさせられた後に下関から帰国したようである。

6．おわりに

「2．経緯」でも述べた通り、SH氏の証言録音記録を改めて聞き直したが、細かいところでは通訳を介して伝えられた内容と少し異なる部分があったものの、それほど決定的な情報は得られず、結局、SH氏の所属部隊の駐屯場所は確定できなかった。

戦争当時を知る証言者に出会うことは年齢的に極めて困難な上に、「韓国支援委員会」の業務縮小に伴い、対外協力が行われなくなったため、筆者や長野県強制労働調査ネットワークによるような生存者聞き取り調査は、事実上最後の機会となった。少ない人数ではあったが、2012年に調査を行うことができて良かった。

ご協力いただいた全ての方々に感謝するとともに、今後も滋賀県における朝鮮人戦時動員や在日朝鮮人の歴史を紐解くことに努力し続けたい。

【参考文献】

雨宮剛編著,2012,『もう一つの強制連行 ― 謎の農耕勤務隊 ― 足元からの検証』私家版

金廣烈,2010,「1945년 전반의 日本陸軍　農耕勤務隊와 피동원 한인 ― 나가노(長野)현 배치 부대를 중심으로」『韓日民族問代研究』19

滋賀県県政史料室編,2013,『公文書でたどる近代滋賀県のあゆみ』サンライズ出版

清水啓介,2011,『防空監視哨調査』私家版

塚崎昌之,2004,「朝鮮人徴兵制度の実態 ― 武器を与えられなかった『兵士』たち」『在日朝鮮人史研究』34

――――,2007,「1945年4月以降の日本への朝鮮人強制連行 ― 朝鮮人『兵士』の果たした役割」『戦争責任研究』55

水谷孝信,2009,『湖国に模擬原爆が落ちた日 ― 滋賀の空襲を追って』サンライズ出版

――――,2014,『本土決戦と滋賀 ― 空襲・予科練・比叡山「桜花」基地』サンライズ出版

【註】

1　長野県強制労働調査ネットワークの原英章氏よりご提供いただいた。

2　국가기록원(国家記録院)「명부소개(名簿紹介)」일제강점기 피해자 명부(日帝強占期被害者名簿)(http://theme.archives.go.kr/next/collection/viewJapaneseIntro.do)。

3　塚崎昌之氏よりご提供いただいた。第九中隊には、他の中隊と異なり表紙が無く、第八中隊の表紙にある「長野地区　滋賀地区」が、第九中隊まで含む可能性もあるとのご教示をいただいた。

4　現、順城初等学校。忠清南道唐津郡順城面鳳巣里59。

5　JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. C12122429700。

6　金致麟「『農耕隊』の名で強制連行」『統一評論』468号、2004年10月。

7　戦友会研究会「戦友会データベース」(http://www.senyuken.jp/database/)。

8　雨宮剛(2012)に掲載。

9　水田誠氏が入手しコピーのご提供をいただいた。